

都市の リスクマネジメント

第107回

東日本大震災8年 釜石の奇跡再考 〜心に堤防を築く防災教育〜

跡見学園女子大学教授

鍵屋

東日本大震災8年

死亡1万5896人、行方不明2536人（警察庁2018・9・10）、震災関連死3701人（復興庁2018・9・30）もの多大な被害をもたらした東日本大震災の発生から8年になる。震災とは自然現象ではなく社会現象であり、東日本大震災はまだ終わっていない。よく「東日本大震災から8年が経過しました」と言われるが、強い違和感を覚える。

2010年度 防災教育チャレンジプラン

津波災害から命を守るために最も重要なこととは、できるだけ早く、海岸からできるだけ高く遠い場所に避難することだ。言葉では簡単だが、それがいかに困難なことか。

2010年度、釜石東中学校は内閣府が主催する防災教育チャレンジプランに応募して、それまでの防災教育の成果の上に「助けられる人から助ける人へ」を合言葉に防災教

育を進めた。2011年2月26日、その報告会があった。たくさん活動をしてきたが、特に印象的だったのは、釜石東中学校の生徒による、鵜住居うのすまい小学校児童との合同避難訓練だった。1回目の訓練では、一応安全と言える場所に生徒・児童が避難し終えるのに30分かつた。学校に帰ってから調べると、津波は最速で30分後には来襲することが分かった。最初の揺れから身を守り、階段を下りてから避難したとすれば、津波から逃げ切れなかったかもしれない。生徒たちは「もう一度、避難訓練をしたい」と先生に訴えた。それに応えて、再度避難訓練を行った結果、同じ場所まで

各団体の総評は、鍵屋 一 委員（板橋区役所 区民文化部 参事）より、まずはチャレンジプランにおける各実践団体の3つのチャレンジについて、「第1のチャレンジは“応募をする”こと、第2のチャレンジは“計画を実践する際に起こる困難を乗り越える”こと、第3のチャレンジは“新たなステージに立って今後継続発展すること”とコメントをいただき、この1年間のチャレンジポイントや今後さらに期待したいことについて、団体ごとに丁寧に説明いただきました。



出典:防災教育チャレンジプランHP

講師する筆者

10分で逃げ切ることができた。発表された村上陽子副校長（当時）は、最初の訓練ではあって、津波到達時間を伝えなかったという。

たまたま、この年は私が総評役であった。非常に印象に残ったので「1回目の訓練では生徒の自主性に思い切って任せた。2回目には、生徒が自ら訓練結果を調査して失敗を認め、再度の訓練により目標を達成した。時間がかかってもいいから、失敗から学ばせる素晴らしい教育だ」と話した。

東日本大震災発生

それから13日後、本当に大津波が襲ってきた。全く情報が入らない中で、あの子どもたちは無事だったろうかと心配だったが、後日、全員が逃げ切ったという連絡が入った。村上副校長、森本晋也教諭、そして長年、釜石東中学校の防災教育を支援されていた片田敏孝群馬大学教授（肩書はすべて当時）ら、いろいろなる方から当時の話を伺ったので、概要をお伝えしたい。



Risk Management



鵜住居小学校 提供:片田敏孝東京大学大学院特任教授

釜石東中学校、鵜住居小学校ともにハザードマップでは白地、すなわち津波が来ないエリアに立地していた。しかし、それまでの防災教育により、中学生は迷うことなく津波避難の道を選んだ。一方で、鵜住居小学校の児童、教職員は3階に避難していたという。それは最初の津波警報で予測された津波の高さが3mだったからだ。その後、気象庁は6m、10mと予測を変えるが、電源が落ちて伝わっていない。この時、釜石東中学校の生徒たちが「津波が来るぞ」と言って逃げて来た。

鵜住居小学校の児童たちは、念のためにとって3階から下りて一緒に避難をする。事前の避難訓練により10分で逃げられるという自信があったからだ。実際には、津波はその後屋上にまで達していた。もしとどまっていたら、恐ろしいことになっていたのではないか。その後、釜石東中学校、鵜住居小学校の総勢600人が避難を行った。地域の人たちは



(津波襲来直前に鵜住居地区住民が撮影)

提供:片田敏孝東京大学大学院特任教授

まだ逃げていなかったが、その様子を見て一緒に避難したという。これは「同調性バイアス」という心理的効果が働いたものだ。人は、自分に都合の悪い情報に接した時、「大丈夫、大丈夫」という意識が働く。これを「正常化の偏見」というが、不安はあるため、周りの人の行動を観察し、誰かが逃げると、一緒になって逃げる。他の人と一緒に行動することで安心感を得ようとするのだ。これが同調性バイアスである。

釜石東中学校の生徒たちは、事前の防災教育でこのことを学んでいた。「率先避難者」になる価値を知っていて、その上で訓練してい

たのだ。そして彼らは、訓練通りに実践し、自分たちの命を守っただけでなく、鵜住居小学校の児童・教職員、地域住民の命を守った。彼らは、これは奇跡ではなく当たり前だと言う。

危機時に命を守るか失うかは、ほんの瞬間の判断で決まる。それを支えるのは日ごろの教育と訓練に尽きる。しかし、人も組織も「正常化の偏見」があつて、当たり前のことが実践できない。それができたこと自体が奇跡なのだ。彼らは、防災教育によって、心の中に決して壊れない大きな、大きな堤防を築いていたのだ。

筆者プロフィール

鍵屋 一 (かぎやはじめ)

1956年秋田県男鹿市生れ。早稲田大学法学部卒業。板橋区防災課長、板橋福祉事務所長、福祉部長、危機管理担当部長(兼務)、議会事務局長等を経て2015年3月退職。京都大学博士(情報学)。2015年4月跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授。法政大学大学院・名古屋大学大学院兼任講師。内閣府「災害時要援護者の避難支援に関する検討会委員」など政府委員。内閣官房地域活性化伝道師、(一社)福祉防災コミュニティ協会代表理事など。著書に『図解よくわかる自治体の防災・危機管理のしくみ』『福祉施設の事業継続計画(BCP)作成ガイド』など